

# 大藪遺跡のふたごの土器 —千数百年ぶりに再会した壺—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 再会したふたごの台付長頸壺

はじめに 写真1の土器は、京都市南区久世殿城町に所在するおおよそ大藪遺跡から出土した、2点の台付長頸壺と呼ばれる弥生時代後期の土器です。

左側のは2022年に、右側はそれより4年前の2018年に隣接する調査地から見つかりました。

これらの土器は、写真でもおわかりいただけるように、色や形、そして素材の土や、製作に用いられた工具、仕上げの手法など細部に至るまで「うりふたつ」で、まるでふたごを見ているようです。

特にそれぞれの寸法は、定規や設計図がない時代に作られたにもか

かわらず、高さをはじめ、口・胴・裾の径までがほぼ同じです。21世紀になって、調査年や実測図を作成した人が異なるのに、実測図面では識別できないほど酷似しています。

**土器の特徴** この2点の土器について、もう少し詳しく観察してみましょう。

高さ、胴の最大径、裾の径の差は4mm以内、口の径は約2mmの僅差、台部に開けられた円孔の大きさはもとより、その位置や個数も共通しています。

なかでも口の作り方は、いったん外側に膨らませるように形作ったのち、まっすぐ上に伸ばし端部を丸

く仕上げるという点で、個人の癖と言えるほどの特徴を見ることができます。



図1 大藪遺跡の位置

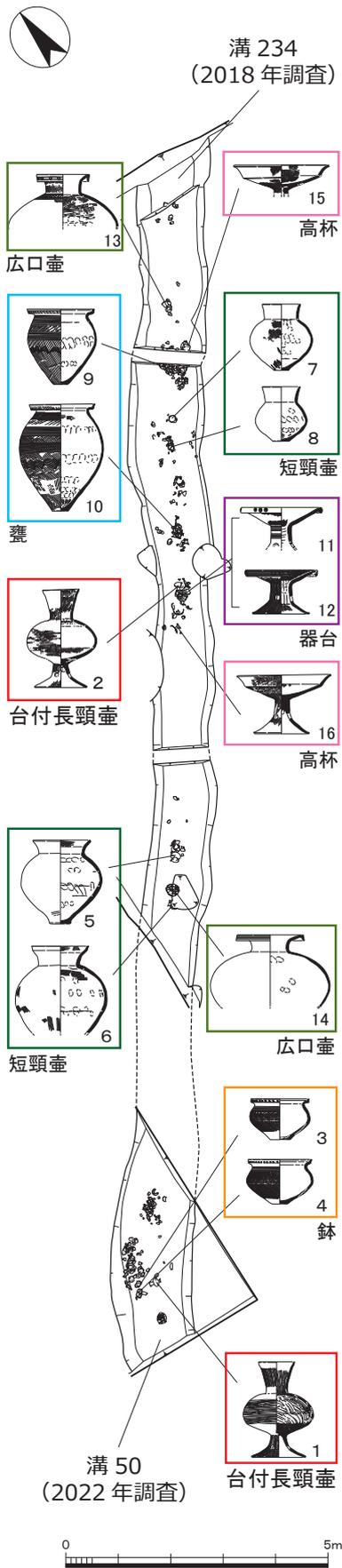


図2 溝50・溝234 土器出土状況

さらに、完成段階では目に触れることのない胴の内面下半部の製作手法についてもほぼ共通しており、ハケ(表面調整)の方向や範囲、頸の部分の内面に施された縦方向のヘラミガキ(表面仕上げ)も同じです。これらの特徴は、ひとりの製作者が時間を経ずして、ともすれば互いを並べながら同時に製作したのではないかと考えたくなるほど似通っています。

また、焼成時に生じた黒斑(色むら)も、それぞれの胴の最大径付近に1カ所ずつ見られます。素材の土の選定から、製作、さらに焼成に至るまで、細かく管理されていたことをうかがわせます。

#### 出土した遺構と2個一対の土器

写真1左側の壺は2022年調査の溝50、同じく右側の壺は2018年調査の溝234から出土していますが、これは調査年次の違いによるもので、本来は連続する一条の溝です(図2)。

周辺の土器の出土位置を目をむけると、溝50出土の3・4の鉢は、大きさは違いますが相似形で、台付長頸壺と同様に、用いられる素材の土はもとより、文様を描いた工具や製作技法までが酷似しています。

この点に注目すると、溝234から出土した5・6と7・8の短頸壺、9・10の甕、11・12の器台は、溝50の鉢と同様に、大きさは異なるものの相似をなし、離れて出土した13・14の広口壺や、15・16の高杯も大きさや器形が近似するため、おのおの2個一対で取り扱われたことをうかがわせます。

さらに、東側約100m隔てた2016年の調査地でも、鉢2点と甕1点



写真2 2016年調査 土器出土状況

が並べられた状態で出土しました(写真2)。そのうち2点の鉢は大小で相似をなし、ここでも2個一対で取り扱われていたことがうかがえそうです。

**土器が意味するもの** 奈良県唐古・鍵遺跡の第69次調査では、ひとつの溝から、赤彩を加えた楯描文が施された弥生時代後期の長頸壺が、5個一組の五つ子の状態で出土しています。いずれもほぼ同形同大で「同一作者と考えられるほど」酷似する土器であることから、「極めて画一的であり、破片での個体識別は困難である」と報告されました。集落の南側を区画する環濠と想定される溝から出土したため、ムラを護る意味で埋置されたと解釈されています。

千数百年の時を隔てて再会した大藪遺跡のふたごや2個一対の土器たちは、今、何を語ろうとしているのでしょうか。

(三好 孝一)